
IS ～運命を切り裂く剣～

ジョーカーアンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜運命を切り裂く剣〜

【Nコード】

N6220Z

【作者名】

ジョーカーアンデッド

【あらすじ】

ISを唯一使える男がいた。
運命を変えた一人の男がいた。
この二人が出会うとき、何かが起こる！
運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（前書き）

独自設定を、含んでおります。

まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

遠い昔、1万年に一度行われる『バトルファイト』と言われる自らの種族をかけた戦いが行われ、ヒューマンアンデッドが勝った。

その数百年後、再び、人々が彼らの封印を解き『バトルファイト』が行われた。

そして、怪人たちは戦いはじめ、人々をも巻き添えにしていた。それを食い止めるために開発された『ライダーシステム』と呼ばれる物を使って、人々を守るために『仮面ライダー』と呼ばれる4人が立ち向った。

恋人の仇を打ち、おのれの恐怖心をも打ち勝つために戦ったギャレン。

邪悪な心に立ち向かうために戦ったレンゲル。

怪人から人間になるために戦ったカリス。

そして、人類を救うために戦ったブレイド。

『バトルファイト』も残り二人になった。

ギラファクワガタの先祖…ギラファアンデッド。

すべてを破壊する存在…ジョーカーアンデッド、もとい、カリス。

ギャレンは、ジョーカーアンデッドが地球を滅ぼすわけがないと彼を信じ、ギラファアンデッドに単身で立ち向かった。

そして、一斉にダークローチが世界に出てきた。

レンゲルは、それをやめさせるためにジョーカーに立ち向かったが、本能にあらがえずにジョーカーアンドッドがレンゲルを倒してしまう。

そして、残ったのは、唯一アンドッドを封印できるブレイドとジョーカーアンドッド。

だが、ブレイドは自らがアンドッドになることで『バトルファイト』に終止符を打たせなかった。

時は流れ、約200年後。

篠ノ之束が作った『IS』は、世界に流通し始めたが、同時に戦争にも使われる可能性もあると疑い、『IS』の中心部であるコアを427個残し、行方をくらます。

ただ、『IS』は、女性にしか使えないということで女尊男卑になってしまった。

だが、女性にしか使えない『IS』を唯一使えた男…織斑 一夏がいた。

そして、裏では『亡国機業』が、全世界を征服するための準備をしていた。

彼らは、見事、『亡国機業』の悪事をつぶせるのか！

運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（後書き）

コメント、お待ちしております。

プロローグ2（前書き）

グダグダになってしまった。

しかも、まだプロローグだあ！

束ちゃんのセリフもおかしくなった気がするう！

それでも、読みたい人はどうぞ！

ブローグ2

ここはとあるラボ。

ここでは、男女2人がひっそりと暮らしていた。

ガシャ　ーーン……ウィー……ガガッ、ガガガ

そして、今、ここで作業をしている彼女：篠ノ之　束は、427
個あるコア以外のコアを使って無人機の『IS』を作っていた。

「束ちゃん！夕食できたよ！」

「はーい！いつま行っきまーす！」

そういつて、束は、彼女を呼んだ男：剣崎　一真に駆け寄っていた。

「今日は、ハンバーグだ。」

「やったー！やったー！」

と、いい、彼に抱き着いた。

「わかった、わかった。」

そして、頭を撫でながら食卓へと向かった。

一真は、食卓でテレビを見てた。

「へえ、男子が『IS』を使える…か。」

「あつ、ソースとつて…！」

「ああ、わかった。それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。」

男が『IS』を使えることってあるの？」

「ないない！あつたら男装した人か、特殊な人間だね。」

あつ！そうそう、そのことでさ、お願いがあるんだけどさ。」

「えっ？なに。」

久しぶりの、お願いだなあ。と、思い、そのお願いを聞き入れることにした。

あまり、束からお願いされたことがなかったからだ。

「あのさあ、いつくんの通ってる『IS学園』を守ってほしいんだけどいいかなあ？」

「いつくんって、織斑 一夏のこと？」

「うん！そうだけど〜！」

えっ、いつくんって一夏のことなんだ〜。「あれっ、でもなんでいつくんなんて言ってるの？」なんて言ってみたら、「いつくんと友達なんだよ〜。」と、言われ、大変なんだろうなあ〜と思った。

「で、なんで？また興味がわいたの？」

そう、篠ノ之 東は、興味がわいた人にしか話をしたことがほとんどない。

剣崎 一真も彼女にあることで気に入られ、彼女のラボに（強制的に）住むことになった。

「違う違う。まあ、それも少しは理由に入るんだけど。で、いつくんが狙われてるんだよ。亡国機業に。」

「亡国機業に。」と、言われたときに一真もタダ事ではないと思っ
い真剣に聞くことにした。

「でも、何故、彼が亡国機業に狙われているんだ？」

そうだ。彼が狙われる理由がない。

なら、何故？

「たぶん、彼にもうすぐ贈られる『白式』が狙われてるんだと思うんだけど、『白式』は、戦闘能力は十分すぎるんだけど、テスト操縦者が乗った時は、IS適正が全員Cだったんだあ。」

「で、その『白式』が、今度、『IS学園』に置かれることになったからってわけなんだあ。」

「それで、その『白式』とその操縦者の織斑　一夏といっしょに守ってくれと。」

「そうなんだけどいいかなあ？」

と、上目遣い＋涙目で言われた。

もともと、断るつもりはなかったため、無駄なんだが。

「行くから、元に戻っていいよ。」

「そうだと思っただよお！」

そついい、後ろからだしたのは、偽造した教員免許と札束を手渡した。

「なにこれは？特にこの免許なんだけど。」

「これは、偽造した『IS学園』の教員免許、これで怪しまれずに学校に教師として行けるね。」

（偽造した時点ですでに怪しまれると思うんだが…。）

「あと、このお金は旅行代ね。守るのは良いけど、少しは、ゆっくりしてね。」

「えっ！あつ、ありがとう！」

「じゃあ、今日は寝ようか。」

と、言い食べ終わった皿を台所に置く。

「わかった。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい！」

そして、夜は更けていった。

次の日、一真は自分のバイク、『ブルースペイダー』に乗り、
『IS学園』に向かった。

プロローグ2（後書き）

コメントお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6220z/>

IS ～運命を切り裂く剣～

2011年12月21日16時45分発行